

シジュウカラ

Parus major

シジュウカラ科・留鳥



シジュウカラ（オス）

名前の由来

「カラ」はシジュウカラ類などのよくさえずる小鳥の総称。地鳴きを「シジュウ」と聞きなしてつけた名。

漢字名：四十雀

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類
ワシ・タカ

特定種

該当なし

形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）14.5cm、翼を開いた際の長さ22cm。スズメくらいの大きさ。

のどから胸、腹にかけてネクタイのような黒い筋がある。頭は黒く、頬は白。首の後も白い。頭の黒とどの黒が首のスジでつながっている。背中では青灰色だが首の周りは黄緑色。

オスの「ネクタイ」は特に下腹で太くなっているが、メスでは細め。

声：ツツピーツツピーとさえずる。

類似種と見分け方：ハシブトガラ、コガラ、ヒガラ。

これらの種にはネクタイ状の黒い筋がない。

ハシブトガラはコガラと非常によく似ていて、ほとんど見分けがつかない。

ヒガラはくちばし下の黒色がのどから首周りを通って頭上の黒色とつながるが、ハシブトガラとコガラはのどまで。シジュウカラとヒガラは首の後ろが白いが、ハシブトガラとコガラは白くない。

日本のカラの仲間ではシジュウカラが一番大きく、コガラが一番小さい。



シジュウカラ。黒いネクタイが大きな特徴だが（左）、首の後ろが白く、背中の上部分の黄緑色も美しい（右円内）



ハシブトガラ。ネクタイはなくのどの黒が小さい



ヒガラ。ネクタイはないが、のどの黒は大きい。首後が白い

生息環境・分布

低地から低山帯の、原生林から人工林まで、様々なタイプの樹林にすむ。冬には平地の公園や住宅地などでもよく見られる。

分布：ユーラシア大陸中緯度地方から南はボルネオ島、ジャワ島まで分布する。

ほぼ全国にいる普通の留鳥である。

北海道では留鳥で、平地から山地にいる。

十勝では留鳥で、平地から山地の樹林に普通にいる。森林の主要種である。

生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
					繁殖							

食性・他生物との関わり

昆虫(成・幼虫)やクモ類を食べる。植物の種子、果実も食べる。

樹林内の下層部で枝から枝へと移動しながら餌を探す。春夏には樹皮につかまり、くちばしで樹皮をほじくったり樹皮片をはぎ取ったりすることが多い。秋には地上部において、落ち葉をひっくり返したりはねのけたりして餌を探することも見られる。枯れ葉がからみ合った固まりを盛んに壊

して、隠れている虫を探し出すこともよくするという。シジュウカラ以外の鳥の行動をよく観察していて、追いついて餌を探したり、コガラやヒガラの貯えた種子などを奪って食べたりもするという。捕食者は猛禽類など。

繁殖生態

繁殖期は4～7月、基本的に一夫一妻で繁殖する。繁殖期にはなわばり性が強く、オスのさえずりやいろいろな対立行動、あるいは実際の争いなどによって守られる。(→興味深い話の項参照)

巣は樹洞やキツツキの古巣などに作られる。春先にオスはメスにピッタリくっついて回りながらあちこちの巣作り候補地を紹介して回るという。(→興味深い話の項参照)

樹洞に大量のコケ類を運び込み、お椀形の巣を作り、産座

には獣毛などを敷くという。巣づくりはメスだけが行う。8～10個産卵し、メスのみが卵を抱く。その間オスはメスに給餌をする。

12～13日でヒナがかえり、ヒナへの給餌はオスメス共同で行う。20～22日でヒナは巣立ち、その後巣立ったヒナは約1ヶ月で独立するのだという。

興味深い話

- 標識調査で、6年の生存が確認されている。
- つがいのうち2%くらいは一夫二妻や一夫三妻が記録されている。
- つがいは冬になっても離れないことが多く、別の相手とつがうのは全体の10%程度だという。
- なわばり争いでは、オスは胸から腹の「ネクタイ」を見せ合ったりするという。
- オスはメスに巣作りの場所を紹介する際、入り口に飛びついて見せたり、樹洞にはいって入り口からのぞき、ほおの白いところをチラチラ見せたりするという。
- 巣箱もよく利用する。

- 生息環境に対しては柔軟性を持っていて、樹木さえ点在していれば、人工化された林(公園など)にも生息する。
- 繁殖期の後半からは、若鳥がルーズな群れを作り、時には100羽くらいの群れにもなるという。
- 冬の間も群れを作るが、しばしば他のカラ類やエナガなどとの混群でいることも多い。
- 秋から冬の群れは夕方になると解散し、それぞれのねぐらへ帰るのだという。
- 冬は餌台に来て脂身やヒマワリの種を好んで食べる。
- 十勝地方のアイヌ語で「エチキチキ」という。

配慮事項

低地から低山の樹洞がある落葉広葉樹林が大事。

参考文献

- 「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997
「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部 1987
「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ 編著、主婦と生活社 1997

- 「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. I～III」清棲幸保、講談社 1978
「山川弘氏からの聞き取り記録」内田祐一 (未発表)

- 中村登流 (1970) 日本におけるカラ類の群集構造の研究. II 摂食場所、食物の季節的変動および生態的分離. 山階鳥研報、6 : 141-169.
斎藤隆史 (1987) シジュウカラ繁殖期の生活を定める冬の群. アニマ、171 : 78-87.
Saito, T. (1979) a Ecological study of social organization in the Great Tit, *Parus major* L. II. Formation of the basic flocks. J. Ymashina Inst. Ornith., 11 : 137-148.
Hinde, R. A. (1952) The behaviour of the Great Tit (*Parus major*) and some other related species. Behaviour Suppl., 2 : 1-201

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・樹林)
鳥類